

# 〈世説体〉の著作から見た 晩明文学の一側面

蔡 麗 玲

## はじめに

『世説新語』（以下、『世説』と略称）は六朝を代表する「志人小説」であり、従来、その文学、哲学及び歴史的価値など、様々な面で高く評価されてきた。このような『世説』は後世に数多くの続書が著され、原作に連なる〈世説体〉小説の流れが形成された。しかし、これらの続書は『世説』に及ばないという意見が小説史の中によく見られる<sup>1)</sup>。このような見解が生じたのは、論者が『世説』の続書に本格的に向き合っていなかったからであると思われる。

実際、千五百年の歴史を持つ〈世説体〉小説は、すでに研究上の重要な課題になりつつある。したがって、これらの作品への関心も高まっている<sup>2)</sup>。唐宋以降の各時代に〈世説体〉小説は著されたが、作品の量が少ないため時代の気風を代表する存在にまではなれなかった。ところが明末清初のわずか百年ほどの間に、〈世説体〉小説は一気に盛んになり、一世を風靡する一つの文学的現象にまでなった。本稿において晩明の〈世説体〉小説をとり上げる理由はそこにある。

世界の文学に目を向ければ、昔から文学の模倣は後代の書き手の、古典の傑作に追いつこうとする努力であり尊敬に値する創作の方法と見なされていたのである。ところが、ロマンチズムの時期以降、模倣作は創作性

の欠如した二流の作品と見なされ、悪名さえ得たのであった。しかし、我々現代人はそうした極端な視点はさておき、文学の本質にこそ着目すべきであろう。

文学作品は大まかに形式と内容の二つの要素によって構成される。模倣作もこの二つの要素から考察することができる。仮に模倣作が先行する作品の形式を踏襲しながらも斬新な内容を記したり、或いはその形式に更に磨きをかけたりしていれば、原作と異なる新たな創作性を獲得したといえよう。更に、全体的に先行する作品に酷似するところまで模倣できたとすれば、それは他でもなく作者の才能があってこそのことであるといえよう。

『世説』の原書ではなく続書を中心とした観点によって晩明の〈世説体〉小説を見直した場合、従来の評価はどのように変わってくるであろうか。

本題に入る前に用語について断っておきたい。本稿において筆者が「小説」という言葉を使わず、「著作」という用語を使うのは、作品の一部が子部小説家類に著録されていないためであり、「著作」という用語を使うことによって全ての作品を包含したいと考えたからである。次に、「晩明」という言葉についてであるが、これについては明末清初という時代にある種の共通する文学的気風が認められるが故に、「晩明」という言葉によって嘉靖年間から清初までの広い範囲を設定することができると考えたためである。また、本稿では版本について詳細な考証を行なわない。ただ、参考のため、第四章に「晩明〈世説体〉著作年表」と「晩明〈世説体〉著作分類表」を添えることにした。

### 一 〈世説体〉著作の定義

『世説』の文学の特徴は、魯迅が「或いは旧聞を掇拾して、或いは近事を記述する。片言隻句と雖も、全て人間の言動である」（或者掇拾旧聞，或者記述近事，雖不過叢殘小語，而俱為人間言動。『中国小説史略』）と言うように、短い逸話ではあるが様々なことを伝えることができる点にある。

中でも人物の批評や清談の内容は読者の関心を呼び、「言を記すと玄遠にして冷峻であり、行を記すと高簡にして瑰奇である」（記言則玄遠冷峻，記行則高簡瑰奇）（同上）といわれる通り，簡潔でありながら名士たちの生き生きとした本質を伝えており，趣の深い筆致となっている。かくして，『世説』は編まれた当時すでに大きな反響を呼んだ。のみならず，後代にも続書が著され，大いに流行したのである。

『世説』の続書には数十作を数える。そのうち代表的なものとしては，唐代には王方慶の『続世説新書』，劉肅の『唐世説新語』，宋代には王讜の『唐語林』，孔平仲の『続世説』，李昉の『南北史続世説』などが挙げられる。清代には章撫功の『漢世説』，顔從喬の『僧世説』などがあり，更に民国期のものとして易宗夔の『新世説』がある。他の時代に比べて，明代，特に晩明期には，枚挙に遑がないほどの作品があり（詳しくは第三章と第四章で述べる），編まれた年代もかなり集中しているところからみて，確かに注目すべき時期となっている。

『世説』は魏晋の名士の逸話を三十六門に分けて収めるという体裁をとっている。この構成は，様々な逸話を内容によって相応しい門に収めるもので，これによって仮に登場する人物が違っていても，同じ主題を表現することができる。「門」は表現のテーマであるため，「門」の名称自体に強烈な思想的内容が込められている<sup>3)</sup>。こういった〈世説体〉小説に共通する体裁である「体」について，『四庫全書総目』にはすでに一定の解釈がある<sup>4)</sup>。謝国楨も「体例」，又は「体裁」と断言している<sup>5)</sup>。〈世説体〉の著作が相継いで編纂されたのは，〈世説体〉が発展していった証拠である。したがって，〈世説体〉は『世説』の体裁に止まらず，全ての〈世説体〉小説が共有する体裁にもなっている<sup>6)</sup>。

「体裁」の「体」は，「自ら一体を成す」，つまり特有の文体を作り上げるという意味が込められている。高洪鈞が言うように，「『世説』はすでに我が国の古小説の中に自ら一体を成したものである。その特徴は洗練され

た言語と蘊蓄の深い意味が込められていることである（『世説』已在我国古小説中自成一體，其特点是語言精煉，辭意雋永）」<sup>7)</sup>。また、楊義は漢魏六朝の〈世説體〉小説を「近子書系統」と呼び、説部の書でありながら子部の書の特性を兼ねるので、この系統の小説を考察するには著者の趣旨と才能を見逃してはならないと主張している<sup>8)</sup>。

## 二 明代の『世説新語』に対する評論

宋本『世説』は明代の中期に再版された後、当時の文士の愛読書となり、晩明期には文学の経典ともなった。ただし、明代の文人が読んだ『世説』には二種類あった。一つは『世説』の原作であり、もう一つは『世説新語補』（以下、『世説補』と略称）である。『世説』の原作としては、嘉靖十四年（1535）呉郡袁褫嘉趣堂刊本（即ち袁本）が出版された後、明代の他の『世説』は全て袁本を底本にした<sup>9)</sup>。『世説補』は万曆十三年（1585）張氏原刊本、十四年（1586）閩中重刊本、又は刊行年不詳の『李卓吾批点世説新語補』などが挙げられる。加えて、『世説補』は『世説』本来の姿ではなかった（詳しくは第三章で論じる）。にもかかわらず、『世説補』は晩明期において一時隆盛を極めたのである。

『世説』の明代の読者は、単に好んで読むに止まらず、様々な角度からその見所も把握して論じた。以下、代表的な意見を挙げよう。

まず嘉趣堂刊本の巻首に、

嘗て載記の述ぶる所を攷ふるに、晋人の話言は、簡約玄澹にして、爾雅にして韻有り。世に言う、江左は清談を善くすと。今『新語』を閲するに、信なるかな、其れ之れを言うなり。（袁褫「刻世説新語序」）<sup>10)</sup>とあり、『世説』は晋人の言行を記載して、「或いは詞冷にして趣遠く、或いは事瑣にして意奧<sup>ふか</sup>し。風旨各殊なれり、人に興託する有り（或詞冷而趣遠、或事瑣而意奧。風旨各殊、人有興託）」と袁褫は評じ、『世説』が主人公の言行を的確に表現していることを認めている。

王思任による「世説新語序」は言語を練成する能力及び人物の描写に着目する。言語の方は、

『説』中の本<sup>もと</sup>一俗語なれど、之れを経れば即ち文なり。本一浅語なれど、之れを経れば即ち蓄なり。本一嫩語なれど、之れを経れば即ち辣なり。蓋し其の牙室は利靈にして、筆顛老秀し、晋人の意を言前に得て、晋人の言を舌外に得るに因ればなり。(『王季重雜著』)<sup>11)</sup>

とある。人物の描写については、

今古風流、惟だ晋代有り。其の正史を読むに至れば、板質冗木、工<sup>たく</sup>みに瀛州学士図を作るが如く、面々肥皙、略老少を具<sup>やや</sup>うと雖も、神情意態、十八人甚だ分別せず。前宋劉義慶『世説新語』を撰し、晋事を湍<sup>たん</sup>羅<sup>ら</sup>して漢魏間十数人を映帶<sup>えいたい</sup>す。門戸自ら開き、科条<sup>べつ</sup>別に定め、其の中頓置安からず、徵伝未だ的せず、吾之れが為に諱む能わず。然れども小摘して短拈し、冷提して忙点す。一語を奏する毎に、幾<sup>ほと</sup>んど王謝桓劉諸人の骨を起たんとし、一一眼前に呵活して毫として追憾する者無し。(同上)<sup>12)</sup>

と述べ、『世説』が人間味を生き生きと描写する筆力を大いに称賛している。

文学の面のみならず、明代の文人は『世説』を読むたびに、鑑賞の視点が広がり理解も深まったのである。次のような歴史書の筆致を見出そうとする傾向も見られる。

余束髮にして『世説』を読むを好み、最も其の微言冷語、古今に妙絶するを喜ぶ。数年を越えて向<sup>さき</sup>の読む者の膚なるを悔ゆる耳。蓋し『世説』の奇、奇は叙事に左氏の嚴整にして雋なる有り、檀弓の簡峭にして緩なる有るに在り。若し字を探し句を疏して以て之れを求むれば、未だ臨川の才鬼の笑う所と為るを免れず。(韓敬「清言序」；鄭仲夔『清言』卷首所収)<sup>13)</sup>

ここには自らの『世説』の史才を認めるに至る道程が述べられている。ま

た、錢謙益も『世説』に備わる歴史書に類する特徴について次のように述べている。

余<sup>わか</sup>少くして『世説』を読み、嘗て<sup>ひそ</sup>窃かに論じて曰く、臨川は史家の巧人なり。遷、固の史法を変じて之れを為す者なり（中略）史家を変じて説家と為す、其の法奇なり。（「玉劍尊聞序」；梁維枢『玉劍尊聞』卷首所収）<sup>14)</sup>

錢氏は史学に対する造詣が深く、このような評価は当時の代表的なものである。

他の晩明の評論は、比較的個人的色彩が強いため、多少『世説』の本質から逸れたものとなっているのだが、文人たちが『世説』を愛読して模倣するに至る心理的要因も窺えるであろう<sup>15)</sup>。以上の評論から分かるように、晩明の文人は『世説』のよき理解者として、その多面的な美質を見抜いた上での確な批評を行っていたことが分かる。彼らは『世説』を模倣したものの、盲従してはいなかったのである。

更に、晩明期に〈世説体〉の著作が盛んになったことについてはもう一つの原因が挙げられる。それは晩明の文人の、魏晋の名士の風格への憧れにある<sup>16)</sup>。李贄が「窃かに以って魏晋諸々の人は標致として甚だしく殊なり（窃以魏晋諸人、標致殊甚）。（『焚書』）というように、魏晋の人物が晩明期の文人の好みであったことも〈世説体〉の著作の流行に影響を与えたはずである。

『世説』が晩明の人々に愛読され、しかも模倣されたことを最も明確な形で伝えているのは姚汝紹による「焦氏類林序」である。

昔、漢末<sup>およ</sup>暨<sup>およ</sup>魏晋の諸公雅だ清言を善くし、警效の間、皆珠玉と成る。宋臨川王劉義慶其の雋永なる者<sup>あつ</sup>を輯めて『世説新語』を為して焉を伝ふ。是れ由り歴代之れを珍とし、今に在りて尤も盛んなり。但だ揮塵者の其の談鋒に資するのみならず、操觚者も亦た掇りて菁藻と為す、信なるかな、其の言の味有るのみ。（『焦氏類林』卷首）<sup>17)</sup>

「歴代之れを珍とし、今に在りて尤も盛んなり」という一言で、晩明の文人にとっての『世説』がいかに重要な地位を占めていたかをはっきりと読みとることができる。

### 三 『何氏語林』と『世説新語補』

上述の原因の他に、〈世説体〉の著作が晩明文学において一種の創作上の気風となっていた理由は、何よりも『世説補』の影響が大きいことにある。関連する人物としては、何良俊（1506－1573）、王世貞（1526－1590）並びに李贄（1527－1602）が最も有名である。

何良俊は『世説』を心から愛し、その文学に追いつくために自ら『何氏語林』（以下、『語林』と略称）を編纂した<sup>18)</sup>。彼は前代の続書に物足りなさを感じたため、漢代以降元代まで千年以上にわたる二千七百数条にも及ぶ逸話を集めて『語林』を編集したのである。『世説』と異なるのは、『語林』はなるべく歴代の逸話を保存するため、資料を取捨するに際して、「玄虚にして簡遠たる」という『世説』の趣旨に拘らないことである<sup>19)</sup>。該書の本文の間には自注と評論が添えられており、更に、収められた資料の出典も記されている。

『語林』は嘉靖二十九年（1550）に完成された後、ただちに当時の名士から好評を博した。陸師道は「悉く其の精深玄遠の言、瓌詭卓絶の跡を取り、聚めて之れを陳べて、劉氏の遺す所、更に搜抉を加え、剪裁属比し、嚴約整潔、前書に下らず」（「何氏語林後序」）<sup>20)</sup>と称賛した。文徵明もその優れて味わい深い筆致を「単詞隻句も、往々にして人をして意消じ、思いを淵永に致し、深く唱嘆するに足らしむ。誠に亦た至理なり。文学行義を寓す<sup>やと</sup>攸の淵<sup>ところ</sup>なり」（「語林原序」）<sup>21)</sup>と評価する。何氏は多方面からのアプローチによって『世説』に追随せんとしていたため、『語林』もそれに見合う様々な果実を結実させ、明代の〈世説体〉著作の手本を確立したのであった。

王世貞は一時期に古文辞派の指導的地位にあった。彼が『世説補』を編纂したのは同じく『世説』の文学に追いつきたい一心からであった。彼は『世説』の長所を、「或いは微を単辞に造し、或いは巧を隻行に徴め、或いは美に因りて以て風を見し、或いは刺に因りて以て賛に通ず。往々にして人をして短詠して躍然たらしめ、長思して未だ罄<sup>つ</sup>きざらしむ」(自序)<sup>22)</sup>にあると考えた。ただ、『世説』に記された時代があまりにも短いことを遺憾に思っていた。彼は『語林』を「事詞が入り雑じって上品ではない(事詞錯出不雅馴)」(同上)といい、単なる『世説』の二番煎じに過ぎないと批判したのである。しかし、『語林』は「門」の名称が『世説』のそれとほぼ同じであり、また元代までの材料を提供できたことによって、『世説補』の編集を促進したものと考えられる。王氏は嘉靖三十五年(1556)に『世説』の十分の八を保留し、『語林』の十分の三を取り入れて『世説補』を編集した<sup>23)</sup>。

『世説補』の晩明文学への影響として一つ挙げられるのは、王世貞が述べた『世説』の特徴が認められ、後の続書を評定する基準にもなったことである。例えば錢棻が王氏の「称ふる所の単詞微に造る、隻行巧みを徴むる、美むるに因りて刺を見<sup>あら</sup>わし、刺に因りて通賛するが如き者を求むれば、(中略)『玉劍尊聞』一書に如くはなし」(「玉劍尊聞序」)<sup>24)</sup>と言ったのは、王世貞の視点の影響にほかならない。

このほか、李贄による批点が付加わったことも晩明期において『世説補』の流行に影響を与えたものと思われる。『李卓吾批点世説新語補』が出現して以降、当時において、国内外を問わず『世説』の最も流行した版本となっていたという<sup>25)</sup>。

『世説補』の編纂から隆盛までの過程は、原書を改編して有名な文士の名を借りたり批点を加えたりするという晩明らしい著作の形と出版界の宣伝の仕方を反映するものと考えられる。『世説補』ができる前に、『世説』は愛読されていたが『語林』のような別個の続書しかなかった。それに対



して『世説補』が出た後、読者はそれを通して魏晋の逸話を楽しむうちに、自ずと編纂者の影響を受けていたのである<sup>26)</sup>。『世説補』がこの時期に盛んに読まれた状況の中で、〈世説体〉の著作もそれまでにない流行を見せていたのである。

#### 四 晩明〈世説体〉著作の年表と分類表について

表一 晩明〈世説体〉著作年表

順番	刊行年	書名	編者・著者	本籍	内容	巻数	門数	序跋
1	嘉靖29年(1550)	何氏語林	何良俊	華亭	漢から元までの逸話	30	38	文徵明序, 陸師道後序
2	嘉靖35年(1556) 万曆13年(1585) 万曆14年(1586) 万曆末	世説新語補 世説新語補(張文柱校刊本) 世説新語補(閩中刻本) 李卓吾批点世説新語補	王世貞	太倉	『世説』と『語林』の一部分を合併する	20	36	王世貞序, 王世懋序, 陳文燭序
3	万曆16年(1588)	焦氏類林	焦竑	江寧	古から元までの逸話	8	59	姚汝紹序, 李登序, 王元貞序, 自序
4	万曆16年	初潭集	李贄	泉州	『世説』と『類林』を合併する	30	5大類 97小類	李贄自序, 又叙
5	万曆20年(1592)	闡然堂類纂	潘士藻	婺源	著者所見雜事	6	6	鄒元標序
6	万曆21年(1593)	賢奕編	劉元卿	安福	歴代名公鉅卿嘉言懿行	4	16	自序, 賀応甲跋
7	万曆38年(1610)	皇明世説新語	李紹文	華亭	万曆初年までの明代の逸話	8	36	陸従平序
8	万曆42年(1614) 或はその少し前	舌華録	曹臣	歙県	漢魏から明までの言葉	9	18	袁中道序, 潘之恒序
9	万曆42年(1614)	益智編	孫能伝	四明	古来奇術で応変する事	41	12大類 74小類	鄒鳴雷序, 自序, 孫能正小引
10	万曆42年(1614)	智品	樊玉衡	黄冈	古代から明代まで智を用いる事	13	7	於倫序
11	万曆44年(1616)	清言	鄭仲夔	信州	漢魏から嘉靖, 隆慶間の逸話偽語	10	36	韓敬序, 曾徵庸序, 朱謀埜序, 龔立本序, 王宇春跋, 董思王跋
12	万曆46年(1618)	玉堂叢語	焦竑	江寧	明初から万曆までの名公鉅卿の逸話	8	54	顧起元序, 郭一鶚序, 自序
13	万曆47年(1619)	瑯嬛史唾	徐象梅	東海	歴史書と小説の中の逸話と言葉	16	122	自序, 項真序
14	万曆年間或はその少し後	霞外壘談	周応治	鄞県	隠逸の人事	10	10	楊徳周序

15	万暦年間或は少し後	学古適用篇	呂純如	呉江	明代までの学ぶべきこと	91	91	自序
16	万暦年間或は少し後	二十一史識余	張墉	錢塘	二十一史中の佳事 雋語	37	57 補遺1	洪吉臣序, 董春 序, 陶汝鼎序, 江右脚序
17	万暦年間或は少し後	西山日記	丁元薦	長興	洪武から万暦まで 朝野事跡	2	36	無
18	泰昌元年(1620)	古今笑(即 古今譚概)	馮夢龍	長洲	上古から明代まで の逸話	36	36	自序, 梅之煩序, 韻社第五入序
19	天啓元年(1621)	南北朝新語	林茂桂	漳浦	南北朝佳事佳話	4	61	自序, 詹子忠又 序, 游士任序
20	天啓6年(1626) 崇禎7年(1634)	智囊(後に 智囊全集) 智囊全集(即 智囊補)	馮夢龍	長洲	古代から明代まで の智術計謀の事	28	10大類 28小類	自序, 馮氏統序, 張明弼序, 沈幾 序
21	天啓7年(1627)	芙蓉鏡寓言	江東偉	開化	先秦から明代まで の逸話	10	36	潘汝楨序, 但宗 泉序, 自序
22	崇禎3年以前	耳新	鄭仲夔	信州	編者所見所聞明代 僻事雋語	8	34	自序, 楊觀吉序
23	崇禎3年(1630)	雋区	同上	同上	明代, 特に著者の 知人たちの逸話	8	34	文震孟序
24	崇禎3年(1630)	十可篇	馬嘉松	平湖	子史, 小説の中の 嘉言懿行及び醜行, 敗徳の言葉	10	10	陳繼儒序, 自序
25	崇禎15年(1642) 以前	玉剣尊聞	梁維枢	真定 常山	明代雅言韻事	10	34	呉偉業序, 錢棻 序, 錢謙益序, 自序
26	順治12年(1655)	快園道古	張岱	山陰	明代逸話	20	20	自序, 董金鑿序
27	康熙3年(1664)	庭聞州世説	宮偉鏐	泰州	泰州雜事	不分卷	無	自序
28	明末清初の間	女世説	李清	揚州	古今女性掌故	4	31	自序
29	明末清初の間	明語林	呉肅公	宣城	明代逸話	14	37	自序
30	明末清初の間	南呉旧話録	李延昱	華亭	明代華亭地域の佳 言韻事	24	24	呉重憲序, 後序

謝国楨は『江浙訪書記』において、明代中期以降、『世説』の続書は数十種にのぼり、時代の気風を形成したと述べている。上の表によれば、著者の中には李贄、焦竑、張岱などの有名な学士もいれば無名な文人もいることが分かる。更に序跋の作者も相当の数にのぼっている。また、先秦から清初にかけての各時代の逸話は全て揃っている。著者の本籍地も江蘇、浙江、安徽、福建など、当時文化の繁栄した地区にあっている。

しかし、これらの作品は、それぞれの編纂の趣旨に応じて資料の取捨、

文学類		何氏語林, 世説新語補, 舌華録, 清言, 雋区, 南北朝新語, 古今譚概
歴史類	前代史料	焦氏類林, 二十一史識余, 瑯嬛史唾
	明代史料	玉堂叢語, 西山日記, 耳新, 快園道古, 明語林, 玉劍尊聞
思想類	知恵重視	益智編, 智品, 智囊全集
	警世垂戒	闇然堂類纂, 賢奕編, 皇明世説新語, 学古適用篇
	個人思想	初潭集
	禅理重視	芙蓉鏡寓言, 十可篇
その他類	地域文献	南呉旧話録, 庭聞州世説
	女性題材	女世説
	隠逸題材	霞外塵談

「門」名のつけ方, 文章の巧拙などの面が異なっている。かくして, 不均質な作品群を考察する際, 分類を行なわなければ分析は困難になる。

甯稼雨は明清の〈世説体〉の著作を「門」の名称によって三つのグループに分けた。一つは全て『世説』の「門」の名称を活かしたもの。一つは『世説』の「門」の名称と少し違っても大部分『世説』の名称に従うもの。もう一つは『世説』を模倣しても「門」の名称がかなり入れ換わっており, しかも, 『世説』の単一の門の拡大を企図しているものになっているもの<sup>27)</sup>。こうした分類法は, 『世説』の「門」名にこだわりすぎる余り, 〈世説体〉の著作を通して晩明の時代精神を捉えるには充分ではないと思われる。そこで, 筆者は, 各作品の編纂の趣旨を把握した上で, 表二で示したような分類を試みた。

「文学類」とは, 言葉や文学を重んじる作品をいう。「歴史類」とは, 史料を収めつつ褒貶の意を託す作品をいう。「思想類」とは, 著者個人の理念に基づく作品, または人の品定めをしたり垂戒をしたりする作品である。「その他」類は専ら一つの題材をめぐる展開される逸話集をさし, 特に地域関係, 女性及び隠逸の題材を中心としたものをそこに含めること

にした。

## 五 〈世説体〉著作から窺える晩明文学の一側面

### (一) 文学類

文学類の作品において、編纂の趣旨として頻用されるキーワードは「清」である。例えば、鄭仲夔の『清言』は即ち「清」によって貫かれたものであるが、この「清」は『世説』に現れる「清」と区別しなければならない。

『世説』に用いられた「清」の意味は三つに分かれる。一つ目は「遠」。二つ目は「簡」であり、「通」「明」にも通じ、一言で表すならば「清通簡要である」といえる。三つ目は「美」を意味し、「高爽」ともえる。三つの意味を併せて「神明開朗」（朗らかなる精神）という、人生の一つの境地を示している。このような境地を支えるのは魏晋の玄学であった<sup>28)</sup>。

『世説』と照らし合わせてみれば、『清言』の「清」は同じく人間や文学を論じる基準であり、理想的な人生を標示する概念でもあるが、やや俗念を退けて自愛するというニュアンスもある。これは晩明の文人が乱世に対処するために敢えて用意した一種の心構えともいえよう。鄭仲夔自身が清らかな才能と人柄の持ち主であるためであろうか、『清言』にも清らかな雰囲気溢れており、文体は簡潔にして洗練されており、主人公の振る舞いも上品であり、しかも世間の俗気に染まっていないように書きあがっていると、明末の論者は評価する<sup>29)</sup>。更にいうと、このような「清」は李贄の「童心説」の主張する、知識と見聞を取り払って最も純粋な心を保とうという説にも通じていて、明らかに明代の思想に由来したものであると思われる<sup>30)</sup>。

また、鄭氏の『雋区』は優れて味わい深い言葉（雋語）を収めるものとなる。『清言』と『雋区』は実は『小窓清紀』『古今韻史』『醉古堂劍掃』などの晩明の「清言」類の作品と酷似している。「清言」類の著作も人の言動を「清」、「韻」、「淡宕」などの基準をもとに編纂したものであるため、

鄭氏の『清言』と『雋区』とともに清らかさと蘊蓄深さという晩明の美学的基準を反映している<sup>31)</sup>。ただ、これらの基準がいかに『世説』に影響されていようとも、晩明の文人はただひたすら魏晋に憧れていたわけではない。明代独特の清言や韻語を対等に記すという態度そのものの中にすでに当代を重視する態度が明らかに見て取れるのである。

文学類の続書は単に言葉へのこだわりには止まらず、『世説』と同じく人間観も含まれている。例えば、馮夢龍の『古今譚概』における「癡趣」と「癖嗜」という「門」名は、晩明文人の人間観を示す象徴的な言葉である。「癡」と「癖」は明末清初の文学や美学においても重要な概念となるので、それを研究するためにも本書は格好の参考資料になるものと思われる。

## (二) 歴史類

同じく明代の史料を集めるものの中、鄭仲夔『耳新』のように風土、宗教、異象といった様々な面から当代の社会生活を捉えようとする歴史書は、独特の歴史観を見せている。その他、明清の政権が移り変わる際に著された『玉剣尊聞』『明語林』『快園道古』には、遺民意識が含まれている。仮にこの類の中の最も完成度の高い作品を挙げるならば、歴史家焦竑による『玉堂叢語』にはほかならない。該書は明代の公卿大夫の言行を網羅して、「義例精しくして権量審<sup>くわ</sup>らか、聞見博くして取舍嚴かなり。詞林一代得失の林、煌煌乎として考鏡すべし」(顧起元序)<sup>32)</sup>と述べられる。本文には人の品定めに関する言葉は含まれてはいないものの、そこにはやはり褒貶の意が込められているのである。

## (三) 思想類

思想類に属する作品は十作もある。有名な小説家馮夢龍による『智囊全集』は、知恵をテーマとしたものである。馮氏によると、知恵を上手く活かすことによって世の中の困難を解決することができるという。更に、先入観や非現実的な考え方を打ち破るにも知恵は役に立つ。何よりも腐敗した万暦年間の政治と社会に対処するために先人の知恵を借りる必要が生じ、

知恵を重視する書籍は時運に応じて盛んになった。中でも『智囊全集』は最もスケールの大きいものであり、「上智」から「雑智」までの計十部に分類することによって、全ての物事を知恵の高低によって徹底的に検討する体裁になっている。馮氏が「吾、智を品するも、人を品するにあらざるなり。其人を惟<sup>おも</sup>はずして其事を惟ひ、其事を惟はずして其智を惟ふ」（馮夢龍自序、『智囊全集』繆詠禾点校本卷首所収）<sup>33)</sup> というように、およそ知恵を身につけた人であれば全て賞賛されるのである。

#### (四) 保守派の非難

〈世説体〉の著作は晩明において次第に有力な文学表現の形になったが、その過程では、保守的な学者の非難にも遭った。例えば、陳龍正は次のような意見を述べている。

古人は醉眠採花も<sup>すべ</sup>都て高趣有り、嘻笑怒罵も皆文章を成す。何者ぞや。淵明は天機素心にして、生死の外に出で、羲皇の上に遊ぶ。東坡は正義名疏朝廷に在り、高篇大牘天下に満つ。故に貴ぶに足るなり。本源有りて方に余致有り、上載を争いて下流を争わず。近世風氣、専ら其の下半を慕う。俗腸を以て清言を構え、韻事を学び、菲劣の才を以て閭巷の猥瑣無益の談を蒐綴し、零散玩弄の書を刊布す。作者自ら賤しからず、観者又た従いて之れを貴ぶ。是れ相率いて丈夫を賤しむを為すのみ<sup>34)</sup>。

陳氏は基本的に晩明の清言や韻語を求める風潮を軽蔑しているため、次のような判断まで下している。

『世説』弇州<sup>よ</sup>自り重ぜられ、亦た自ら一時の興を寄すなり。弇州文を<sup>つく</sup>為り、従りて其の習気を渉らず。世俗弇州を重んずるを知る。然れども古文詞を学ぶ者、往々にして<sup>みだ</sup>漫りに本領無く、『世説』の句を用いず、即ち以て韻にあらざると為す……噫、陋や極まれり<sup>35)</sup>。

古文辞派のリーダーであった王世貞の『世説補』は認められるのだが、王氏を尊重する余り、秦漢の古文を手本とした古文辞を創作する時までも

『世説』のような筆致を取るのには批判されるという。陳氏の指摘は当を得たものであるか否かについて更に考察する必要があるが、ここで吟味に値するのは、『世説』に習う風習が「陋習」といわれること自体は晩明における文化の多元化を示すと同時に、『世説』の影響力がいかに強大なものであるか、更には〈世説体〉の著作がいかに人々の骨身にしみ込んでいるかという事実を、如実に示していると思われるのである。

### お わ り に

『世説』の続書に関して言えば、晩明期の作品は特に注目すべきものである。本稿では文学の模倣作においても創作性はあるという視点に立って、晩明の〈世説体〉の著作を再評価してみた。最後に、実証的調査の結果を踏まえて、晩明の各〈世説体〉著作の形成、発展、分類及び編纂の趣旨を考察した結果として、晩明文学をめぐるいくつかの事実についてまとめておくことにする。

明代の文人は『世説』に対して的確な批評を下していた。それらの評論のレベルは相当高いものである。

何良俊は明代最初の『世説』の続書である『何氏語林』を編纂した。本書は続書でありながら何氏の学問と文学的実力の結晶であり、明代における『世説』の続書の模範となった。

また王世貞は『世説』と『語林』の内容を統合して『世説補』を編纂した。王世貞は文学のリーダー的存在にあつたため、『世説補』そのものが重視され、王氏の『世説』に対する批評も晩明期から定着していた。ところが、『世説補』は刊行されるたびに内容が増加したため、その原貌は失われてしまった。にもかかわらず、『李卓吾批点世説新語補』が流行したことによって『世説補』は明末において一時の隆盛を極め、海外にまで広まったのである。

『世説補』は晩明の〈世説体〉の著作全体における分水嶺である。とい

うのは、本書が出現する前に『世説』を模倣するのは編者個人の志向に過ぎなかったが、本書の流行を境として三十作以上の続書が編纂され、晩明の顕著な文学の風習となったからである。

筆者は晩明の〈世説体〉の作品を研究するために、「文学」「歴史」「思想」「その他」という四つの基準に基づいてそれらを分類し、更に各書の編集の趣旨を考察することにより、晩明の文学における様々な側面を摘抉することができた。また、保守派の学者が『世説』を模倣する現象を非難する評論も取り上げることにより、〈世説体〉著作が晩明期においていかに盛んであったかということを示した。〈世説体〉著作は、今後晩明の文学を更に掘り下げるには欠かせない資料となるであろう。

全体的にいうと、晩明期の数々の『世説』の続書は我々に原作の精神が生き延びたことを感じさせる。また、『世説』の体裁も晩明の〈世説体〉の著作を通じて更に変化していたことも窺える。それとともに、晩明の文人は〈世説体〉の著作に勤めて取り組むことによって当時の言語や思想を書き留めていたのである。よって〈世説体〉という体裁に新たな内容を加えることにもなった。優れた晩明の〈世説体〉著作においては、模倣と創作とはもはや分ち難いほどに接近していたと考えられる。

最後に、現段階では晩明の〈世説体〉の著作に関しては個別の考察がまだ充分ではないと思われる。ただ、近年、各時代の〈世説体〉の作品が続々と影印刊行されたことは、すなわち個別の作品に対する研究環境が徐々に整いつつあることを意味している。個別の作品の研究を着実に積み重ねることによって、初めて晩明の文化と結びつけることが可能になるであろう。今後、『世説新語補』を中心に日本に現存する晩明の〈世説体〉の著作についても調査を行なうことにより、如上の仮説を補完していきたいと考えている。



## 注

- 1) 例えば范煙橋『中国小説史』(台北：漢京，1983) 頁163-164に「模仿世説新語者，前代已多(中略)或増補，或拡充，或継続，都無新意」とある。また，魯迅『中国小説史略』(北京：人民文学，1981 『魯迅全集』第九卷) 頁66に「世説一流，仿者尤衆(中略)然纂旧聞則別無穎異，述時事則傷於矯揉」とある。
- 2) 筆者は1993年7月に「從晚明〈世説体〉著作的流行論張岱的『快園道古』(新竹：清華大学文学所修士論文)」という論文を提出した。この論文は台湾では初めて全面的に晚明の『世説』の続書を考察したものであり，提出後十数年来，台湾学界でしだいに重視されるようになり，晚明文学や〈世説体〉の著作を研究する学者によってしばしば引用されている。
- 3) 甯稼雨「“世説体”初探」(『中国古典文学論叢』第6輯(中青年專号) 北京：人民文学，1987)，頁92。
- 4) 『四庫全書総目』子部小説家存類一，『玉堂叢語』提要に「是編仿世説之体」とある。
- 5) 謝国楨『明清筆記談叢』(九龍：華夏，1967) 頁27，『玉堂叢語』条に「是書則仿世説新語体例」とある。謝氏『江浙訪書記』(北京：三聯，1985) 頁316-317，『玉璽新譚』条に「体裁」とあり，意味は「体例」と同じ。
- 6) 甯稼雨前掲論文，頁87-105。また，楊義も「〈世説体〉小説」という言葉を使用する。楊氏『中国古典小説史論』(北京：中国社会科学，1995)，頁126-148による。
- 7) 高洪鈞「所見南北朝新語与忠義録」，『文献』1991第3期所収，頁225。
- 8) 楊義「漢魏六朝〈世説体〉小説的流變」，『中国社会科学』1991第4期，頁86。
- 9) 嘉靖14年，袁褰は家蔵の陸游校刊本『世説』を彫って印刷した。これは嘉趣堂刊本といい，明清時代に流通していた『世説』の底本となった。明末清初の際，『世説補』が流行したため，『世説』原作の風貌が知られなくなっていった。『世説』原作の全様が復活したのは道光年間以降のことであった。
- 10) 原文は「嘗攷載記所述，晋人話言，簡約玄澹，爾雅有韻，世言江左善清談，今閱新語，信乎其言之也」。
- 11) 原文は「説中本一俗語，經之即文。本一淺語，經之即蓄。本一嫩語，經之即辣。蓋其牙室利靈，筆顛老秀，得晋人之意於言前，而因得晋人之言於舌外」。
- 12) 原文は「今古風流，惟有晋代。至読其正史，板質冗木，如工作瀛州学士図，面々肥皙，雖略具老少，而神情意態，十八人不甚分別。前宋劉義慶撰世説新

語，崑羅晋事而暎帶漢魏間十数人。門戸自開，科条另定，其中頓置不安，微伝未的，吾不能為之諱。然而小摘短拈，冷提忙点，每奏一語，幾欲起王謝桓劉諸人之骨，一一呵活眼前而毫無追憾者」。

- 13) 原文は「余束髮好讀世説，最喜其微言冷語，妙絶古今。越数年而悔向之讀者膚耳。蓋世説之奇，奇在叙事有左氏之嚴整而雋，有檀弓之簡峭而緩。若探字疏句以求之，未免為臨川才鬼所笑」。
- 14) 原文は「余少讀世説，嘗窃論曰：臨川史家之巧人也。變遷，固之史法而為之者也（中略）變史家為説家，其法奇」。
- 15) 例えば，江東偉『芙蓉鏡寓言・自序』（杭州：浙江古籍，1986）に，「世説之妙，納須彌於芥子，機鋒似沈，滑稽又冷，寓言鏡也」とある。これは禅の道理による読み方であるが個性的な鑑賞方法といえよう。また，李長敷は「予有世説癖」と述べる（李清『女世説』自序 陳汝衡「女世説兩種」[陳氏『説苑珍聞』所収，上海：古籍，1981] から引用した）。晩明の文人は己の癖を恥とせず，逆にそれは個性と深い感情の表れだと考える。よって，〈世説癖〉という言葉自体は晩明らしさが感じられる。
- 16) 陳文新『中国文言小説流派研究』（武昌：武漢大学，1993）頁95に，「（魏晋）名士風度在晩明極有市場」とある。論証のしかたに難点はあるものの，当を得た批評であると言える。
- 17) 原文は「昔漢末暨魏晋諸公雅善清言，警欬間皆成珠玉。宋臨川王劉義慶輯其雋永者為世説新語伝焉，由是歷代珍之，在今尤盛。不但揮麈者資其談鋒，而操觚者亦掇為菁藻，信乎其言之有味也已」。
- 18) 『何氏語林』巻首，文徵明「語林原序」に，何良俊は『世説』を好むがゆえに「研尋演繹，積有歳年。搜覧篇籍，思企芳躅」とある。
- 19) 『何氏語林』巻4，「言語上」小引に，「世説之詮事也，以玄虚標準。其選言也以簡遠為宗，非此弗録。余懼後世典籍漸亡，旧聞放失，苟或泥此，所遺実多。故……不得尽如世説」とある。
- 20) 原文は「悉取其精深玄遠之言，瓌詭卓絶之跡，聚而陳之，而劉氏所遺，更加搜抉，剪裁属比，嚴約整潔，不下前書」。
- 21) 原文は「単詞隻句，往々令人意消，思致淵永，足深唱嘆，誠亦至理，攸寓文学行義之淵也」。
- 22) 原文は「或造微於単辞，或微巧於隻行，或因美以見風，或因刺以通贊。往々使人短詠而躍然，長思而未罄」。
- 23) 最初の『世説補』には注釈が入っていなかった。万暦13年（1585）に張文柱が『世説補』を校刊する際，注釈を補って，上部に劉辰翁による評語と世

- 懋（世貞弟）による批釈を付け加えた。
- 24) 原文は「求如（元美先生）所称造微单詞，微巧隻行，因美見刺，因刺通贊者，莫若……玉劍尊聞一書」とあるが，王世貞の原文に「或因美以見風」とある。
- 25) 筆者が万暦14年（1586）閩中刊本を見たところでは，李贄の批点はまだ入っていないため，李批は万暦14年以降万暦末までの間に付け加えられたと考えられる。
- 26) 曹徵庸「清言序」（鄭仲夔『清言』卷首）に「独怪夫嘉隆以前学者知有所謂世説者絶少，自王元美世説補出，而始知有所謂世説，然已非晋宋之世説矣」とある。
- 27) 注3 甯氏論文頁91。
- 28) 陳文新前掲書，頁89—90による。
- 29) 董思王「清言跋」では，鄭仲夔のことを「風雨一室，琴書自娛，非幽人韻士，屣不為倒也。発而為詩文，清氣逼人，雜之庾開府，鮑參軍集中，恐不能辨」と記している。同序にまた「品不清，才不清，未有能為清言者也」とある。
- 30) 『経世捷録』卷首所収，徐開禧序に「今世寓道者帶道學習氣，握文者帶文章習氣。此二習者，名宿之所未免，意色紆止間，欲削之而特甚者也。余觀胄師（即ち鄭仲夔）両無涉而各臻其至」とある。
- 31) 「清」は「韻」や「淡宕」とほぼ同じ概念。晩明の清言は，盛んになっていた時期，収められる言葉，体裁などの面で鄭氏『清言』『雋区』と近いとはいへ，少し異なる面もある。清言は，短い言葉で哲理を伝えるものであるので，対句などの〈世説体〉小説より簡潔な文体をとっている。
- 32) 原文は「義例精而權量審，聞見博而取舍嚴，詞林一代得失之林，煌煌乎可考鏡矣」。
- 33) 原文は「吾品智也，非品人也。不惟其人惟其事，不惟其事惟其智」。
- 34) 陳龍正，『幾亭外書』（明崇禎辛未〔4年，1631〕刊本）卷2，「随処學問・人文上下截」による。原文は「古人醉眠採花，都有高趣，嘻笑怒罵，皆成文章。何者。淵明天機素心，出生死之外，遊羲皇之上。東坡正議名疏在朝廷，高篇大牘滿天下，故足貴也。有本源方有余致，争上截不爭下流。近世風氣，專慕其下半。以俗腸搆清言，學韻事，以菲劣才而蒐綴閭巷猥瑣無益之談，刊布零散玩弄之書。作者不自賤，而觀者又從而貴之。是相率而為賤丈夫也已」。
- 35) 前掲書，卷9，「緒緒・世説」条。原文は「世説重自弇州，亦自一時寄興，弇州為文從不涉其習氣。世俗知重弇州，然學古文詞者，往々漫無本領，不用

世説句即以為不韻……噫。陋也極矣」。また、薛岡『天爵堂筆余』（『明史研究論叢』江蘇古籍，1991から引用）巻1にも「士大夫家少年子弟，必不宜使讀『世説』。未得其雋永，先習其簡傲，不可不慎」とある。